

「生きた議論、生産的議論の方法を学び演習する」

世界原子力大学夏季研修2012年：講師としてのコメント

JNES 下村 和生



- ・ 各種シンポジウム・セミナー等において、講演を行う、又はパネリストとして討議に参加するなどの経験を重ねる度、「講師も学ぶところ極めて多」の感。とりわけ当該WNU夏季研修のように、世界各国から約80名の若手・中堅の専門家と講師が、双方向のDEBATE形式で聴講・討議をするシチュエーションでは、講師も専門的なコンピテンシーに加えて高度のコミュニケーション能力も必要とされる。
- ・ 当該WNU夏季研修では、「講演(約50分講演、10分質疑)を行い、その後、グループ(10班)討議への参加(約1時間半)。最後に同じセッションにおける他の講演者(合計4名)を合わせた討議セッション(約1時間)への参加」、というもの。
- ・ よくある日本での研修コースのように、一方的な講義を聴いて、簡単な質疑のみで終わるようなものとは異なる。少人数討議(1班7-8名)を組み合わせた十分な討議時間を設ける形式をとることにより、研修生は、「双方向でDEBATE形式の議論と結論導出、最適な妥協点到達の過程」を学ぶというもの。今後、日本でもこのような形式の研修・訓練の場が必要と思料。
- ・ 私の講演では、福島事故に関する国会事故調、政府事故調等の報告書において取りまとめられた要点を中心に紹介し、加えて、自分の原子力発電所の運転員としての経験、日本国政府、国際機関等における経験等に基づく意見・コメント等を織り込みながら実施。
- ・ いずれにしても、日本からの研修生が、6週間のWNU夏季研修において、他国からの研修生、講師等による講演・DEBATEを通じて取り込んだ知見・経験・識見等を将来の糧とすることを期待したい。国際感覚を持って対応できる人材の養成の重要性も福島事故からの重要な教訓であると認識。

(了)